



熱爛やときをり意欲わく傘寿
 霜月の柿の葉寿司の佳かりけり
 奥山源丘
 逝くものへ冬の花火の翡翠色
 窪田英治
 人類の思ひは手から大根引く
 清水道径
 十万字の森よ卒業論文よ
 篠遠早紀
 人類に焚火竈火戦の火
 幹自聲
 紙漉くは恋を追ひ駆けるやうな
 原田宏子
 騎士の眼を据ゑ白鳥となりにけり
 岩上諒磨
 枯野道この世の端といふところ
 田中利政
 懸大根プロレスの村起しかな
 工藤貢
 鉄瓶をちんちん鳴らし神迎ふ
 功刀たかね
 冬青空や胴体は一行詩
 酒井和子
 白雪糕ゆつくり甘し冬紅葉
 松井弓
 小春日や琥珀に透ける鳥の羽根
 漆戸洋子
 咲きしもの鎮め煌めく凍土かな
 大澤淳基

*

丁半で決めし結婚冬うらら
 芳川莞久子
 人間の盾とふ所業秋落暉
 小伊藤美保子
 空風やおつ切りこみの鍋の吹く
 宮岡光子
 着弾の痕にあらねど大根穴
 安部克詠
 夢日記つけ始めるや石路の花
 二木暖
 カフェテラスは紅花蔵や秋日濃し
 中村博子
 針供養忘れ去られた言葉たち
 池間キヨ子
 湯豆腐やがつがつ生きる時は過ぎ
 柿谷有史
 どの胸も枯野がありて母を恋ふ
 志摩晴樹
 縄つ跳びとんでどの子も麗子像
 島田謙吉
 枯木星陶工は炎に仕へ老ゆ
 佐藤初子
 工場のごとき焼場よ石路の花
 松本京子
 ひもすがら甚兵衛鮫に侍る鮫
 北沢雅子
 白菜を一刀芯に菩薩座す
 馬場慧子
 更ける夜の足にやさしき杉落葉
 生野智久

巻頭寸言 俳句の世界はかつてない「混乱期」に差し掛かっている。SNS (Social Networking Service) ソーシャルネットワークングサービスという、お互いに携帯で俳句を作り取りができる「便利な」機会を手にしたからである。ただし、これには「やろうと思えば」という個人の判断が極めて大事になる。私は、海外にいる家族などとはLINE・ラインというサービスを利用している。稀に俳句審査や会議や講演などはオンラインで行うことがあっても、俳句に関する発表形式は旧来の紙媒体(俳句誌)のみである。なぜか。現在の私見としては、俳句が持つ「時間の抹殺」(反復して初めて時間を回復する)という詩型の特異性は、利便さではなく、紙媒体が持つ総合的な記録性という保守性に馴染むからである。あるいはこれは私を感じる、慣れという現状の一過性かもしれないが、紙媒体は決して廃れるものではないと信じている。

そこで、本年の課題は、俳句の鑑賞力をいかに身につけるかである。深読みを勧めるのではない。バランスが取れた的確な読みができることが、優れた作り手には必要である。あまりにも俗な恣意的な読みが広がるのも俳句の混乱期と思うのである。鑑賞力を鍛える企画を本誌では考えたい。

なり、省みて、人生の掛け替えのない最高のときであったと感激するのであるが、純粹に当然のように、無限の力を読み手にも与えてくれる。素晴らしい句である。

霜月の柿の葉寿司の佳かりけり 栗原利代子

「霜月」が効く。柿の葉が寿司に馴染む頃である。魚の発酵もよく、奈良の名物の逸品だ。福島米雄さんを思う。

逝くものへ冬の火花の翡翠色 窪田 英治

当人は眼にしたのか。残酷なのか、幸いなのか。詠み手には忘れ難い光景の演出である。日常からのわずかな発見が光る。平凡からの紙一重の見抜きが大事なことを思わせる。

人類に焚火竈火戦の火 幹 自聲

火を起すことは、自然の火事などから、初めて人間が見つけたものである。焚火も竈火も暮しの大事な火。ところが戦火は人殺しの火。自らの火により破壊を齎すとはいかに愚

今月の秀句

騎士の眼を据ゑ白鳥となりけり 若上 諒磨

白鳥は鳥の貴公子。あるいはナイト。眼が鋭い。表現に余裕がある。それほど新しい見方ではない。勿論平凡ではない。適度に巧い。誰かが言っていないであろうが、すぐに名句は浮かばない。そこを突いて表現している。

人類の思いとは「手」から始まる原始性への着眼点

人類の思ひは手から大根引く 清水 道徑

人類という大きな集団へ思いを寄せている。これが現代の俳句の社会性とでもいう「流行」であろう。戦後俳句は社会性が特徴であったとは、近刊『戦後俳句史』(ウェブ・二〇二三年十二月刊)での筑紫磐井の見解である。イデオロギーの意ではなく、社会への関心、態度といえど金子兜太を連想するが、妥当な見方と思う。上掲句の作者はそれが「手」から始まると捉えた。素朴な優れた着眼点である。

熱燭やときをり意欲わく傘寿 奥山 源丘

熱燭をちびりちびりやりながら、やってやろうと意欲が湧く。傘寿(八十歳)となると、この程度だという。平凡といえど平平凡。 「ときをり」が面白い。意欲ばかりでなく、熱燭にも響いている。意欲を掻き立てるための熱燭か。

十万字の森よ卒業論文よ 篠遠 早紀

「十万字の森」がいい。迷路を掻きわけける「森」の彷徨。言葉に没頭したわが青春。二度とない希望に燃えたのである。後になんか、どこか余裕を感じさせるのが不思議な句である。

かなことか。遅いはずの人類史がなんと痛ましいことか。

紙漉くは恋を追ひ駆けるやうな 原田 宏子

ひたむきな恋を思わせる、なかなかの名句。楮をどろどろに液状に加工した液体を漉き舟に満たし、簀笥を上下させて漉く。追いつ追われつ、これぞ恋と思わせる。

枯野道この世の端といふところ 田中 利政

作者のつましやかな人柄を思わせる。句集『たまゆらの霧』(岳書館・二〇二三年十二月刊)はその集積といえる。しみじみと胸を打つ。「この世の端」とは半生を経た自得の感慨である。俳句は端の文芸と思えば、滋味がある。芭蕉最晩年の〈此道や行人なしに秋の暮〉よりも、掲句にはほっと和む安らぎがある。

懸大根プロレスの村起しかな 工藤 貢

北海道新篠津村での「北都プロレス」が知られる。懸大根の時期、楽しみが少ない村の活性化に、村起しプロレスがひととはたらき。村人参加のプロレス、その賞品が面白い。「除雪した雪四〇〇トン」「砂利五〇〇トン」「ワカサギ二十四時間釣り放題」など。作者は、世の中の変った話題を拾い集める名人。

鉄瓶をちんちん鳴らし神迎ふ 功刀たかね

出雲へ談合に出かけた在村の神さまのお帰り詠。さぞ寒かったらうと湯をちんちん沸かしお迎えする。ユーモア横溢。

冬青空や胴体は一行詩 酒井 和子

晴れた冬の空の下にあるトルソー。見つめれば詩が湧く。俳句といわないで「一行詩」とバタくさい方がいい方が的確。抑えが効いた表現がトルソーの肌を撫でるように感じさせる。

白雪糕ゆつくり甘し冬紅葉 松井 弓

良寛さんが好んだお菓子「白雪糕」。落雁の類。出雲崎の尼瀬の菓子店大黒屋オリジナルで黒田杏子推奨銘菓。「ゆつくり甘し」とはなかなか安らぎがある。取り合せが鮮やか。

小春日や琥珀に透ける鳥の羽根 漆戸 洋子

丁寧な詠み方に隙がない。華やきがある。ひたすら見ることに徹してきた作者に生れた余裕の作。代表作になろう。

今月の秀句

丁半で決めし結婚冬うらら 芳川莞久子

大胆な句である。一句から、どこか日本離れを感じる。句の底流を流れるのはあっけらかんとした処世観。丁半は賭場のことば。巧く生かして季語の冬うららも結婚譚の回想によく響く。仄聞するところによると、満州奉天生れ。終戦四年後に最終の引揚船で帰国。大学卒業後、大手の出版社に勤務、ベテランの編集者であられたとか。句も人もスケールが大きい。いよいよ力量発揮、期待の時代到来である。

カフェテラスは紅花蔵や秋日濃し 中村 博子

山形あたりの紅花蔵がお洒落な喫茶店に。旅吟の一齣か。

針供養忘れ去られた言葉たち 池間キヨ子

針供養の仕来りも廃れ気味。お針に纏わる言葉も消えてゆく。日本語とは程遠い横文字ばかりが幅を利かせて。これは悲しいことである。外来語大いに結構。しかし、日本語による表現に苦心することで意識が鮮明に深められるのである。

湯豆腐やがつがつ生きる時は過ぎ 柿谷 有史

視力ご不自由な有史君に教えられることが多い。湯豆腐をつつき、「がつがつ」生きる時代はもう過ぎた。昭和の戦後はますががつが時代だった。後へどんな時代が来たのか。顧みると昭和時代が終り、平成・令和と三十五年が経過する。この時代は「がつがつ」から「もうもう(濛々)」時代、曖昧なのである。自ら生き方を模索しなければならぬ。大変な時代だ。

どの胸も枯野がありて母を恋ふ 志摩 晴樹

純情この上ない作者。母がわが燠火。枯野を抱えて生きるとは現代人の生存のぎりぎりを思わせる。枯野くらべが現代。

縄つ跳びとんでどの子も麗子像 島田 謙吉

岸田劉生描く麗子像とは子供ながら品格がある。作者九十二歳。メモに昭和戦後は昭和四十年代まで、生き方の底流には旧制高校風な「教養」主義があったのではないかと。鋭い指摘である。虚を突かれた感じだ。上掲句の子の品もそれ。

咲きしもの鎮め煌めく凍土かな 大澤 淳基

札幌在住の作者。花を思い、それを鎮めきらめく「凍土」の大きな荒涼たる広がりには圧倒された。名句である。

人間の盾との残酷極まる所業の凝視―その沈着さに注目

人間の盾とふ所業秋落暉 小伊藤美保子

人質を「人間の盾」として利用し、戦況により殺害するという中東アラブ・イスラエル戦争の悲惨な報道が「秋落暉」で鮮やかに表現され、深く胸を打つ。季語の力をしっかり感じさせる秀作である。こつこつと努力家の作者。社会性俳句の最前線の句材を見事に昇華している。

空風やおつ切りこみの鍋の吹く 宮岡 光子

関東平野の空っ風が吹く。「おつ切りこみ」は上州、群馬の冬の常食である。里芋、大根、人参など野菜沢山、豚肉も入れ、麵の生地を麵棒で巻いて、包丁で切り込む。名称にも気合が入る。地域の煮込み饅頭である。熱々を口にする。目に見えるようだ。今年は何れでという意気込みがすばらしい。

着弾の痕にあらねど大根穴 安部 克詠

戦いはごめん。大根を抜いた穴を見ても、はっとする。

夢日記つけ始めるや石路の花 二木 暖

高山寺の明恵上人ではないが、夢日記開始。夢は緩やかに別世界へ繋がる。ベルクソンの研究者である作者はどんな生命の哲学、『創造的進化』を開陳するか楽しみ。

枯木星陶工は炎に仕へ老ゆ 佐藤 初子

栃木県益子在住の作者。原句「炎に仕へ陶工老ゆ」はリズムが弛むので推敲した。枯木星に陶工の矜持が伺え心やすまる。熱心なグループが益子を中心に結集している。注目の地。

工場のとき焼場よ石路の花 松本 京子

気がつきながら表現できなかった点に、冷静な発見がある。死が無感動に処理される。高齢社会に入り、量産される死。季語による救いを忘れない。岡山のベテラン。

ひもすがら甚兵衛鮫に侍る鮫 北沢 雅子

水族館の水槽の中の光景か。女房役の鮫の指摘が面白い。白菜を一刀芯に菩薩座す 馬場 慧子

この発見には一つの型があり、すでに承知であるが、白菜の薄黄色の芯に菩薩を見る信心に惹かれる。ういういしい。更ける夜の足にやさしき杉落葉 生野 智久

一瞬の気づきに感心した。「杉落葉」を踏む夜の感触。気づいた上で、的確に表現したセンスのよさが素晴らしい。

他に推薦候補作をあげる。

白き息吐きて目瞑る子の青春 田中 純子

木枯に堪ふるひと葉あり明し 依田 ひろ

日々ちがふ恙なだめて今朝の冬 松本よし乃

蜂の子を抜くや夜なべの灯を低く 小野 す美

枯薄薙ぐ怒りなどなきものを 河西 将

方舟のこと江りくる朴落葉 木村 安以